相互行為儀礼連鎖理論の研究動向について

戴　　雨　濛

は　じ　め　に

人間が感情的な生き物であることは間違いない。私たちは愛することができると同時に，憎むこともできる。私たちは喜びや楽しみを経験することができると同時に，悲しみや怒りを経験することもできる。しかし，社会学研究の歴史を振り返ると，社会学者が感情を体系的に研究し始めたのは 1970 年代に入ってからである（Turner 2005: 1＝2007: 1）。少し考えてみれば，社会学において感情が重要であることがわかるであろう。なぜなら，感情は社会における「接着剤」としての機能を発揮するからである。感情は社会構造や文化的象徴体系を可能にする（Turner 2005: 1＝2007: 1）。同時に人間関係を疎外し，社会構造を破壊し，文化的伝統に挑戦することもある。社会学研究の一分野としての感情社会学は，せいぜい 50 年の歴史しかない。ランドル・コリンズによれば，エミール・デュルケム，タルコット・パーソンズ，マックス・ウェーバー，カール・マルクスといった社会学者の理論に感情の存在が暗示されているという。そして，彼らが暗黙のうちに感情に言及した根底には，当時の理論がマクロ至上主義であったことがある（Collins 2004: 102-103＝2012: 151-152）。さらに，コリンズは，感情社会学が社会学の中心的な問いに答えることができると考えた。人々にこの種の感情を抱かせる条件を説明することができれば，社会学理論の核となる部分を手に入れることになるだろうとコリンズは指摘した（Collins 2004: 103＝2012: 152）。

以上の説明から，感情社会学が社会学研究にとって重要であることは明らかである。コリンズは相互行為儀礼連鎖の理論を提示することで，自分自身が投げかけた問いに答えている。相互行為儀礼連鎖理論は，デュルケムの宗教社会学に起源を持っているが，コリンズはアービング・ゴッフマンの考えを取り入れて独自の相互行為儀礼連鎖理論を構築した。コリンズは，この儀礼論の伝統をまとめにした上で，シンボリック相互作用論，エスノメソドロジー，社会構築論，感情社会学を統合した相互行為儀礼連鎖理論を構築した（Collins 2004: xi＝2012: 1）。

他の研究者の研究（Bericat 2015; Turner 2009）においても，感情社会学の研究を行う際に使う理論は異なるものの，相互行為儀礼連鎖理論的視点に言及されている。このように，社会学の中心的な問いに対する答えとして存在する感情社会学にとっても，相互行為儀礼連鎖理論は重要であることがわかる。ということは，突き詰めて考えれば，相互行為儀礼連鎖理論は社会学の中心的な問いに答えることができることになる。

筆者は，修士課程で，中国におけるファン文化の現地化の過程を研究した。その際に，データ分析には，相互行為儀礼連鎖理論を使用した。その中で，相互行為儀礼連鎖理論の適用範囲の広さと同時に，理論的に不十分なところがあることに気付いた。博士課程の研究では，ファン研究に相互行為儀礼連鎖理論を使い続けるだけでなく，相互行為儀礼連鎖理論自体の理論的な欠陥を修正することも視野に入れている。しかし，この理論は日本の社会学界ではあまり注目されていない。Google Scholar や CiNii で検索しても，相互行為儀礼連鎖理論に関する論文はほとんどなく，いまだにほとんどの研究がゴッフマンの相互行為儀礼理論で止まっている。

そこで，本稿では，コリンズの相互行為儀礼連鎖理論を要約するとともに，近年の相互行為儀礼連鎖理論に関する最新の研究成果をまとめることを主な目的とする。なぜなら，相互行為儀礼連鎖理論の学術研究を総括することで，今後の研究の方向性を見出すことができるからである。

本稿は，大きく分けて，コリンズの相互行為儀礼連鎖理論の概要，相互行為儀礼連鎖理論の最近の研究動向の紹介，最後にまとめと今後の課題という構成になっている。相互行為儀礼連鎖理論の最近の研究動向では，相互

行為儀礼連鎖理論全体の最新動向と，相互行為儀礼連鎖理論の重要な概念である感情的エネルギーに関する最新の研究動向という二つの方向からまとめていくことにする。最後に今後の理論的研究の方向性を提示したい。

1　ランドル・コリンズの相互行為儀礼連鎖

この節では，コリンズの相互作用的儀礼連鎖の理論を要約する。原著は非常に長いので，ここでは重要な要素のみを要約する。すなわち，相互行為儀礼の要素・結果モデルと，感情的エネルギーという重要概念の 2 つについてである。

1.1　相互行為儀礼の要素・結果モデル

コリンズは，同じく社会学者であるゴッフマンの「相互行為儀礼」という概念を用い，「相互行為儀礼連鎖」の理論を提案した（Collins 2004＝2012）。相互行為儀礼という概念は直接，ゴッフマンに由来するものであるが，ゴッフマンはこの概念を定義せずに論文集のタイトルとして用いただけである（Fine 2005: 1287-1288）。そこでコリンズは，これを踏まえて，「儀礼とは，感情や注意を相互に集中させるメカニズムで，瞬間的に共有された現実を形成し，それによって集団の連帯や集団の一員としてのシンボルを作り出すもの」という相互行為儀礼の定義を提唱している（Collins 2004: 7＝2012: 24）。

コリンズは，相互行為儀礼を，相互的焦点・感情的同調（mutual-focus/emotional-entrainment）のメカニズムを指す広義の用語として用いている（Collins 2004: xi＝2012: 2）。相互行為儀礼連鎖理論の中心的なメカニズムは，高度な相互注意，すなわち高度な相互主観性が，身体的結合と参加者の神経系の相互覚醒・喚起を通じた高度な感情的結合と組み合わされ，認知的シンボルに関連したメンバーシップ意識の形成につながるというものである。また，参加者一人一人に感情的エネルギーをもたらし，自信を持ち，熱意を持ち，道徳的に許されると信じていることをやりたいという気持ちにさせてくれるとコリンズは指摘している。

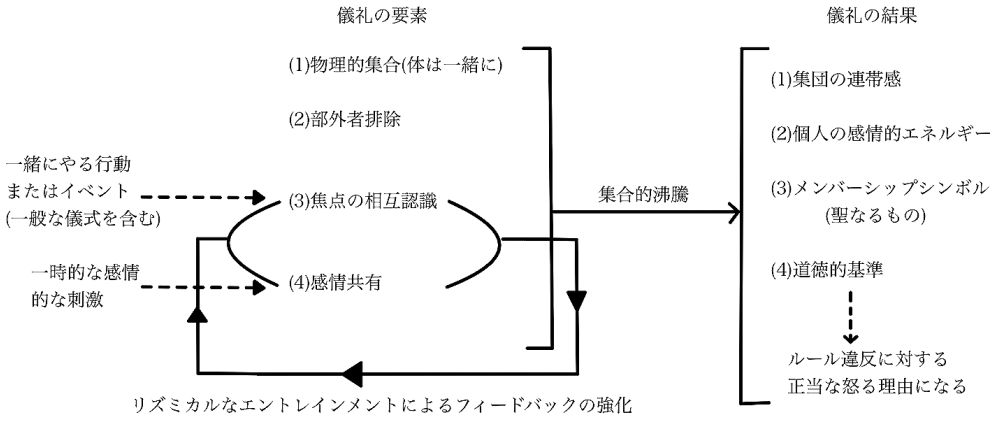

図　コリンズの相互行為儀礼連鎖
（Collins 2004: 48, figure 2.1＝2012: 80，図 2-1）

コリンズは，上の図の中にある相互行為儀礼の 4 つの要素を指摘している。(1) 物理的集合（group assembly（bodily co-presence））：2 人以上の人が同じ場所に集まることである。(2) 部外者排除（barrier to outsiders）：部外者には境界線を設定し，誰が参加していて誰が除外されているかを参加者が把握できるようにしている。(3) 焦点の相互認識（mutual focus of attention）：人は共通の対象や活動に焦点を絞り，その焦点を伝え合うことで，互いの焦点を相互に認識するようになる。(4) 感情共有（shared mood）：人は共通の感情や情緒的な経験を共有している。

そして，相互行為儀礼は以下のような結果を生み出す。(1) 集団の連帯感：ある集団への帰属意識である。(2) 個人の感情的エネルギー（Emotional Energy）：行動を起こす上での自信，気力，熱意，主体性を感じることである。(3) メンバーシップシンボル：サインやメンバーがグループに接続されていると感じるようにする表現（比喩的なアイコン，言葉，ジェスチャー）のことである。(4) 道徳的基準：集団の中で正義感を保ち，集団のシン

ボルを尊重し，そのシンボルを侵害する者に侵害されないようにすることである。

すべての相互行為儀礼が同じ結果を生むわけではなく，実行された相互行為儀礼の内容によって結果は異なる。そして，相互行為儀礼も失敗することがある。4 つの条件を満たした相互行為儀礼がすべて成功すると言えない。コリンズは，成功した相互行為儀礼がどのようなものかを明確には述べていない。しかし，失敗した相互行為儀礼の特徴については説明している。すなわち，「最も直接的には，集団の興奮度が低いこと，即応性がないこと，共有されたつながりがまったくないか，ほとんどないこと」と，アウトプット側の明らかな特徴である「集団の一体感の欠如または不在，そもそもないあるいは変化のない個人のアイデンティティの感覚，集団のシンボルに対する敬意の欠如，感情的エネルギーの上昇がないこと」である（Collins 2004: 51＝2012: 84）。以上の説明から，この相互行為儀礼に参加したメンバーが興奮しなかったり，失望したりしていた時点で，相互行為儀礼が失敗したということがわかる（Collins 2004: 51＝2012: 84）。

1.2　感情的エネルギーの概念

コリンズの相互行為儀礼モデルにおいて，感情的エネルギーの概念は重要な位置を占めている。コリンズにとって，感情的エネルギーは社会的相互作用に不可欠な要素である。感情的エネルギーは，相互行為儀礼連鎖の中心的な構成要素であると同時に，その結果でもある（Collins 2004: 102＝2012: 151）。相互行為儀礼が成功したときに生じる感情的エネルギーは，次の相互作用に影響を与えるので，コリンズは相互行為儀礼を感情の変圧器と呼んでいる（Collins 2004: 107-111＝2012: 158-163）。コリンズにとって，感情的エネルギーは相互行為儀礼の中心的な構成要素なのである。

この場合の感情は，特定の感情という通常の意味での感情ではない。長期的に安定した社会的な感情を感情的エネルギーと呼ぶ。コリンズは著書の中で，感情的エネルギーとは，長期間にわたる相互行為儀礼の結果であり，自信，熱意，良好な自己感情を持つ高域から，平凡な中域を経て，抑うつ，自発性の欠如，否定的な自己感情を持つ低域に至る連続体であると定義している（Collins 2004: 108＝2012: 159-160）。そして，コリンズは，人間は感情的エネルギーによって動かされる生き物であると主張している。そうすると，人々は感情的エネルギーを利用するために「合理的な選択」をしているとコリンズは仮定している。コリンズはこうして人間の行動の動機付けモデルを，次のように提案している。

> 人間は，コストや利益を計算するのは得意ではないが，あらゆるものを基本的な動機への貢献度で無意識に判断できるため，目標を向けて手探りで進む。その基本的な動機とは，相互行為儀礼において最大限の感情的エネルギーを求めるというものである。
>
> （Collins 2004: xiii＝2012: 4）

2　相互行為儀礼連鎖の最新研究

前節では，相互行為儀礼連鎖理論の要点を紹介した。しかし，相互行為儀礼連鎖理論は 18 年前[1)]に提出されたもので，この理論に関する研究はさらに進んでいる。そこで，本節では，相互行為儀礼連鎖理論に関する最近の動向をまとめてみることにしたい。この節は，2.1 相互行為儀礼の補足と，2.2 感情エネルギーの補足の 2 つに分けられる。

2.1　相互行為儀礼の補足

コリンズの相互行為儀礼連鎖理論は，他の研究者によって，さらに精緻化されつつある。その最たるものが，エリカ・サマーズ・エフラーの研究である（2002, 2004）。諸葛維達は，「〔サマーズ・エフラーは〕シンボリック相互行為論から自己の概念を，神経生物学から生理的なメカニズムをコリンズの相互行為儀礼連鎖理論に導入し，相互行為儀礼理論をさらに発展させた」と，サマーズ・エフラーの研究を高く評価している（諸葛　2021: 36,

1）本稿は 2022 年に書かれたものである。ここでいう 18 年とは，2004 年に『Interaction ritual chains（相互行為儀礼連鎖）』が出版されたときのことである。

〔　〕内は引用者）。

サマーズ・エフラーは，コリンズの理論を様々な方面で発展させた。第一に，2002 年の研究で，対面的な相互作用において女性が選択した従属的な位置づけを制限する感情の力学と，フェミニズムの感覚と抵抗活動に従事する意志を育む社会的プロセスを研究した。従属的な位置にいる女性は，現状維持よりも，現状に対する抵抗に従事することでより多くの感情的エネルギーを得ることができるとサマーズ・エフラーが結論を付けた（Summers-Effler 2002）。

第二に，サマーズ・エフラー（2004a）は家庭内暴力の研究を通じて，感情的エネルギーを最大化する直接的な方法が効果的でない場合，人々は感情的エネルギーを最大化する間接的な方法を用いることを発見した。このような間接的な方法を，サマーズ・エフラーは「防衛戦略（Defensive Strategies）」と呼んでいる（Summers-Effler 2004a: 310）。人は，感情的エネルギーを最大化するために直接的かつ先手を打つのではなく，感情的エネルギーの損失を最小限に抑えるために間接的な方法をとることが多い。

第三に，サマーズ・エフラーは自己，生物学的，文化的要因を相互行為儀礼連鎖理論に組み込んでいる（Summers-Effler 2004b）。サマーズ・エフラーの理論は，コリンズの理論と同じく，人間が相互行為をするときの選択基準は，感情的エネルギーを最大化することにある。しかし，感情的エネルギーを高める方法について，コリンズが提案した権力や地位の儀礼や他者との団結を築くという二つの方法以外，サマーズ・エフラーは自己拡張（Self-expansion）も感情的エネルギーを高めることができると主張している。サマーズ・エフラーにとって，自己は相互作用における重要な力である。自己が肯定されると，個人はポジティブな感情的エネルギーを経験し，集団の団結を感じしやすくなる。他方で，自己を容易に確認できないと，ネガティブな感情的エネルギーを経験し，集団に必要な連帯感を持ちにくくなるという。

また，他の研究者によって，相互行為儀礼の 4 つの要素のひとつである物理的集合（group assembly（bodily co-presence））の必要性も検討されている。物理的集合は，相互行為儀礼にとって本当に重要なのだろうか。この点は，新型コロナウイルスの蔓延という新たなパンデミックが出現し，対面でのコミュニケーションが極めて希薄になった現在，とくに重要な点であると言えよう。なぜなら，オンライでの相互行為の分析の可能性に関わってくるからである。

潘曙雅と張煜祺（2014）は，2014 年に行ったオンラインファンコミュニティに関する研究で，テレビドラマを一緒に見たファンがリアルタイムで議論する集合的沸騰があり，相互行為儀礼として成功することを発見した。Web 2.0 時代に入り，Web 上でのリアルタイムのやり取りはもはや目新しいものではなくなった。相互行為儀礼連鎖理論が中国の学界で広くオンライン相互行為儀礼の研究に使われ始めたのは，潘と張の（2014）研究の存在によるものである。

コリンズ自身は，『相互行為儀礼連鎖』の中で，物理的集合が必要であると主張していた。そして，新しい文献では，相互行為儀礼連鎖理論はインターネット上の関係にも適用できるが，物理的集合は依然として成功の重要な条件であると主張している（Collins 2020）。遠隔の相互行為儀礼は中程度の成功を収めるが，実際にはより低いレベルの連帯感や感情的エネルギーしか生みださない。コリンズ自身の言葉を借りれば，これは力の希薄化である（Collins 2020: 496）。

物理的集合の必要性について論じてきたが，既存の相互行為儀礼のモデルはまだ完成しているとは言い難い。2019 年と 2020 年の 2 つの研究において，2 人の研究者は，相互行為儀礼を補完する他の条件やメカニズムを導入する必要性について議論した。

アンソニー・キングは，その研究の中で 2 つの疑問を投げかけている。第一の疑問は，コリンズのモデルとは逆に，権力の相互行為儀礼はより大きな感情的エネルギーを生み出さないのではないか，という疑問である（King 2019）。第二の疑問は，感情的エネルギーが自動的に服従を生み出すわけではないのではないか，という疑問である。キングによれば，相互行為儀礼に感情的なものよりも優先される他の多くの動機付け要因がある。そうでなければ，人間は感情的に好ましくない相互行為に直面し，しばしば反抗し，逸脱することを選ぶだろう。名誉・恥辱のメカニズムを導入することで，キングは，相互行為儀礼は純粋な感情に支えられているだけでなく，より強力な名誉・恥辱のメカニズムによって支えられていると結論づけている。

トッド・W. ファーガソン（2020）は，相互行為儀礼連鎖理論にジェンダー的条件を付け加えることを主張して

いる。コリンズの議論では，個人差を無視するつもりでシチュエーションの重要性を優先しているが，この個人差は本当に無視できるものなのだろうか。ファーガソンは2001年のアメリカ教会生活調査のデータを分析した結果，男性が女性よりも感情的エネルギーのレベルが低いことを発見した。また，男女比も影響しており，男性の比率が高い教会では，感情的エネルギーのレベルが低くなっている。この研究から示唆されることは，今後の研究では，文化的文脈によって構築される個人差にも，焦点を当てる必要があるということである。

2.2　感情的エネルギーの補足

1.2の部分で感情的エネルギー定義を述べた。この定義だけを見ると，暴力や紛争を引き起こす感情的エネルギーは，宗教的興奮や熱狂的愛国心，恋愛を生み出すものと区別がつかないように見える。これらの感情的エネルギーの違いを説明するためには感情的エネルギーの概念をより詳細に分類する必要がある。

そこで2015年，デビッド・ボインズとサラ・ルエリは，ネガティブな感情的エネルギー（negative emotional energy）という概念を導入し，6つの命題を提案した。彼らは感情的エネルギーを2つに分け，先のコリンズ理論における感情的エネルギーをポジティブな感情的エネルギー（positive emotional energy）と呼び，ポジティブな感情的エネルギーの反対をネガティブな感情的エネルギー（negative emotional energy）と呼んだ。ポジティブな感情的エネルギー（ee^{+}）は親和性（affinity）に関する感情的エネルギーを表し，ネガティブな感情的エネルギー（ee^{-}）は憎悪（enmity）に関する感情的エネルギーを表す（Boyns, Luery 2015: 154）。ボインズとルエリの研究は，感情的エネルギーの概念の幅を広げたといえるだろう。

そして，イザベル・ブラムセンとポール・ポーダーの紛争と紛争変換（conflict transformation）に関する研究（2018）では，感情的エネルギーの第3の次元が提案されており，さらに感情的エネルギーの概念を充実させることになった。ポジティブな感情的エネルギーとネガティブな感情的エネルギーに加えて，減少した感情的エネルギー（diminished EE）という概念を導入したのである。この減少した感情的エネルギーが発生した場合は，退屈，無気力，疲弊につながり，それによって個人の行為主体性（agency）を低下させる（Bramsen, Poder 2018: 6）。

感情的エネルギーの概念は，より大きなモデルへと展開することができる。例えば，ウェイン・E. ベイカーは，彼の論文（2019）の中で，感情的エネルギーは3つの分析層に分けられると指摘した。それは，個人の感情的エネルギーのミクロレベル，関係エネルギーのメゾレベル，エネルギーネットワークのマクロレベルという階層化モデルである。しかし，ベイカーは，このモデルは理論的には存在するが，まだ十分に発展しておらず，一方，実証的な研究も不足していると述べている（Baker 2019: 390）。

また，次のような疑問も提起されるだろう。つまり，相互行為儀礼が失敗すると感情的エネルギーが失われるが，その場合，人はどのように感情的エネルギーを補充しているのだろうか。2022年にローレン・マッカーシーとサラ・グローザーが行った研究は，その疑問に取り組んだものである。あるフェミニスト団体を対象に調査した結果，人は2つの方法で感情的エネルギーを補充することができると結論づけた。他者との経験が一致した時は，人は集団化し，集団の連帯を構築することで感情的エネルギーが補充できる。そして，経験がずれたときには，集団から離れ，感覚的撤退（sensory retreat）と呼ばれる行動をとることで，感情的エネルギーを補充できる（McCarthy, Glozer 2022: 371）。感覚的撤退の概念は，集団から離れることで強力な自己防衛メカニズムや行為者が苦痛な感情を抑制するのではなく，効果的に「自己管理」する方法を効果的に明らかにすることができる。

3　まとめと今後の課題

本稿では，アメリカの社会学者ランドル・コリンズが2004年に提唱した「相互行為儀礼連鎖理論」と紹介とその後の研究動向について体系的な文献レビューを行った。

相互行為儀礼連鎖理論に関する研究は年々増えており，大きく分けると，相互行為儀礼に関する議論と，感情的エネルギーの概念に関する議論とに分けられる。この2つの側面に関する文献を，それぞれ2.1, 2.2でレビューした。

まず，コリンズ以降の研究は，相互行為儀礼を補足する傾向がある。中には，他の理論から概念を導入し，相互行為儀礼連鎖理論に補足する者もいる。また，他のメカニズムを導入することで補足することもある。同時に，

相互行為儀礼が，ウェブ 2.0 時代を迎えた今，物理的集合を必要とするかどうかの研究も行われている。この部分から，今後の研究の目標は，相互行為儀礼連鎖理論を向上させるために，多学科的，多理論的な観点の統合であることがわかるだろう。

そして，感情的エネルギーの概念に関する議論では，研究者たちは概念モデルをより豊かにすることに傾注していることがわかった。研究視点の階層モデルであれ，個人に対する感情的エネルギーの別カテゴリーの追加であれ，感情的エネルギーの概念をより充実させることは，集団の中での個人の相互行為をより多角的に分析することを可能にすると思われる。また，感情的エネルギーを補充する方法について新しい概念を提唱している学者もいる。

今回の文献レビューにより，この理論をいかに充実させるかについて，これまでの研究者がとってきた方向性がわかった。一方，日本の社会学界では，相互行為儀礼連鎖理論の研究は未開拓の状態である。この理論を発展させるために，次に何をすべきなのか。以前の研究者の研究を参考にして，相互行為儀礼のモデルを充実させるとともに，感情的エネルギーの概念そのものを充実させるべきだと考える。例えば，ベイカーは，感情的エネルギーに関する階層モデルは理論的にしか存在せず，実証的な研究が不足していると指摘しているが，モデルが現実にも当てはまることを証明するために実証的な研究をしていく必要があるだろう。3 つのカテゴリーに分けられるようになった感情的エネルギーの概念を，感情的エネルギーの階層モデルと組み合わせることも可能かもしれない。また，性別という個人差以外にも，相互行為儀礼に影響を与える条件があるかもしれない。あるいは，個人が集団から距離を置くことで，感情的エネルギーを補充し，自己防衛を図ることができる。それでは，個人が最終的に集団から離脱する要因は何なのだろうか。そして，集団から離脱した後，個人にとってどのような意味のあるメンバーシップシンボルが存在するのだろうか。これらの問題が，今後，私たちが取り組むべき問題だということができるだろう。

参 考 文 献

Baker, W. E., 2019, “Emotional energy, relational energy, and organizational energy: toward a multilevel model,” *Annual Review of Organizational Psychology and Organizational Behavior,* 6（1）：373-395.

Bericat, E., 2015, “The sociology of emotions: Four decades of progress,” *Current Sociology,* 64（3）：491-513.

Bramsen, I., Poder, P., 2018, “Emotional dynamics in conflict and conflict transformation,” *Berghof Foundation.*

Collins, R., 2004, *Interaction ritual chains,* Princeton: Princeton University Press.（＝林聚任，王鹏，宋丽君，2012，*互动仪式链,* 北京：商务印书馆.）

Collins, R., 2020, “Social distancing as a critical test of the micro-sociology of solidarity,” *American Journal of Cultural Sociology,* 8（3）：477-497.

Boyns, D., and Luery, S., 2015, “Negative Emotional Energy: A Theory of the “Dark-Side” of Interaction Ritual Chains,” *Social Sciences,* 4: 148-170.

Ferguson, T. W., 2020, “Whose Bodies? Bringing gender into interaction ritual chain theory,” *Sociology of Religion,* 81（3）：247-271.

Fine, G. A., 2005, “Interaction Ritual Chains. By Randall Collins. Princeton University Press, 2004. 439 pp,” *Social Forces,* 83（3）：1287-1288.

King, A., 2019, “Emotion, interaction and the structure-agency problem: Building on the sociology of Randall Collins,” *Thesis Eleven,* 154（1）：38-51.

McCarthy, L., and Glozer, S., 2022, “Heart, Mind and Body: #NoMorePage 3 and the Replenishment of Emotional Energy,” *Organization Studies,* 43（3）：369-394.

Summers-Effler, E., 2002, “The micro potential for social change: Emotion, consciousness, and social movement formation,” *Sociological Theory,* 20: 41-60.

Summers-Effler, E., 2004 a, “Defensive strategies: The formation and social implications of patterned self-destructive behavior,” *Theory and Research on Human Emotions,* 21: 309-325.

Summers-Effler, E., 2004 b, “A theory of the self, emotion, and culture,” *Theory and Research on Human Emotions,* 21: 273-308

Turner, J. H., and Stets, J. E., 2005, *The Sociology of Emotions,* Cambridge: Cambridge University Press.（＝孙俊才，文军，2007，*情感社会学,* 上海：上海人民出版社.）

Turner, J. H., 2009, “The sociology of emotions: Basic theoretical arguments,” *Emotion Review,* 1（4）：340-354.

潘曙雅，張煜祺，2014，“虚拟在场：网络粉丝社群的互动仪式链.”，*国际新闻界*，35-46.

诸葛维达，2021，*社群交往与情感团结：对网络游戏社群的互动仪式链观察,* 北京：社会科学文献出版社.